

パリ通信 (139号・2023年7月号)

聖ドニ大聖堂

7月14日「フランス革命記念日」はフランス絶対王制の終焉とフランス共和制の始まりを記念する祭日である。今年パリでフランス語研修中の日本人学生グループと一緒に「聖ドニ大聖堂」を見学した。



3世紀イタリアからキリスト教伝道のために弟子ルスティクスとエレウテルスを連れてパリに来たのがデイオニュシウス(聖ドニ)で、パリ最初の司教になる。伝説によれば、モンマルトルの丘で異教徒に剣で首を落とされた聖ドニは、自分の首を拾って両手に抱え、サン・ドニ(パリから北に約20km)まで歩きながら説教を続けたという。

弟子二人も同じく斬首された。聖ドニが息途絶えたという

場所に「聖ドニ大聖堂」が建立されている。5世紀から何度も建て替えられたが、12世紀聖ドニ大聖堂司祭シュジェ(1081-1151)の意により、当時最新の建築技術であるゴシック様式の教会が生まれる。「交差オジーブ(教会建築でアーチ型の天井を支えるリヴ)」によって高く伸びる空間、ステンドグラスを施した「バラ窓」から色とりどりの明るい光が差し込み、光に溢れる内部は実際の高さ(29m)より圧倒的に高く見える。

ゴシック様式が頂点に至る13世紀はルイ9世(聖ルイ王)の治世である。パリにサント・シャペルを建立し、シャルトル大聖堂のバラ窓を寄進し、聖ドニ大聖堂の建替えに出資した聖ルイ王によって、今日、42名の王、32名の王妃、63名の王族を納めるフランス王家の墓所に相応しい大聖堂となったのである。

キリスト教に改宗した最初のフランス王クロヴィス1世(フランク王メロヴィング朝)(在位481-511)。カロリング朝ピピン3世(小ピピン)からカペー朝、ヴァロワ朝、ブルボン朝とフランス絶対王制の王の横臥像が並んでいる。1515年若干20歳で「マリニヤンの戦い」で勝利を取めたフランソワ1世の墓は、勝利を讃える大きな凱旋門と古代ギリシア・ロー



マの柱で飾られ、ダヴィンチを擁護し、イタリア・ルネサンスをフランスに導入したフランソワ1世を象徴する作品である。

フランソワ1世の息子アンリ2世とフィレンツェから王妃として迎えられたカトリーヌ・ド・メディチスの墓はピンクと白の大理石の台座に黒の像を配す(異なる色を好んで併用する)イタリア・ルネサンスの特徴を有している。

1793年1月コンコルド広場でギロチンに架けられたルイ16世と同じく1793年10月コンコルド広場で斬首されたマリーアントワネットの像もある。ルイ16世とマリーアントワネットは処刑後マドレーヌの墓地に埋葬されていたが、ルイ16世の弟でナポレオン1世失脚後王政復古で王になったルイ18世が遺灰を聖ドニ大聖堂に移す際

に造らせた1830年頃の像である。

地下礼拝堂があり、聖ドニが葬られたとされるところで、カロリング朝時代の柱、発掘された石棺などを見ることができる。ルイ16世とマリーアントワネットが処刑された後、8歳で2年間だけ牢獄で王位を継いだルイ17世の墓碑がある。1785年ヴェルサイユ宮殿で生まれ、1789年フランス革命で捕らえられ、幼少のためギロチンは免れたものの牢獄で病死した。

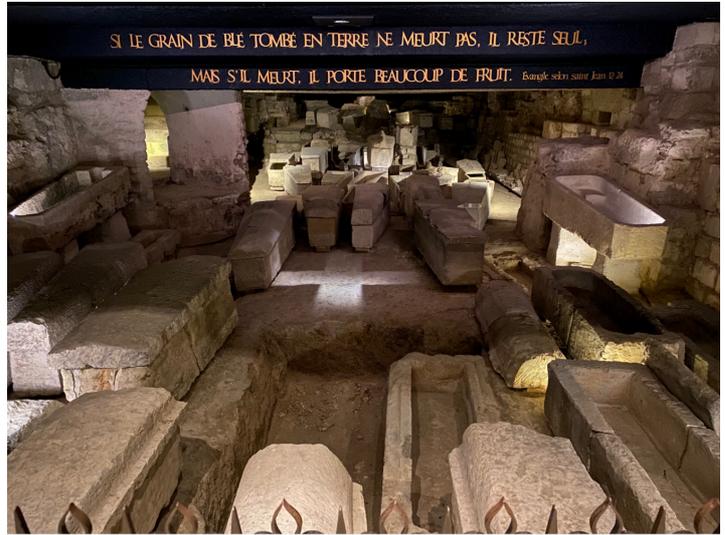
ところが最近になって、実はルイ17世は牢獄から脱出して生き延び、自分はその末裔であるという者が出てきた。ルイ17世の墓を開き、心臓のDNAをマリーアントワネットの髪の毛のDNAと比較鑑定し、ルイ17世は間違いなく1793年パリで死亡したと証明された。ルイ17世の心臓はガラス瓶に入れられ墓碑の下に納めてある。

最後に聖ドニ大聖堂に入ったのはルイ18世で、棺には名前が彫られているだけで何の装飾もない。ルイ16世を始め、散逸した王家の遺骨や墓を聖ドニ大聖堂に集め、自分もそこに眠る最後のフランス王である。

ルイ16世とマリーアントワネット王妃の墓



6世紀キリスト教の王となったクロ
ヴィス1世からルイ18世まで1300年
のフランス王家の墓所となった聖ドニ
大聖堂。革命期にはバラ窓も壊されて
荒れ果てた聖堂を修復したのは19世
紀の建築家ヴィオレ・ル・デュック
(1814-1879)。火災で喪失したパリ・
ノートルダム寺院の尖塔を建て、カル
カソンヌ城を再建した人である。世界
史の教科書に過ぎなかったフランスの
歴史を実際の建物や作品に触れること
で身近に感じる見学だった。(古賀順子記)



写真の教会地下の聖ドニの墓跡に掲げられている聖句は次のとおりです。

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のみである。だが、
死ねば、多くの実を結ぶ。

ヨハネによる福音書12章24節